

平成31年3月29日

## 研究開発完了報告書

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成30年 6月 1日（契約締結日）～平成31年 3月30日

#### 2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 塩田 誠一郎

#### 3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

#### 4 研究開発概要

##### ○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

##### ○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

##### ○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

#### 5 管理機関の取組・支援実績

##### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		○	○				○	○		○	○	



③「情報伝達」の技術…「情報を整理分類する」「ラベリングする」「空間的・時間的秩序の原則」等の情報を分かりやすく伝える方法。

※思考を広げ、論理的な文章に組み立てる手法として、「マッピング」を活用した。

※高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナル・エッセイ」作成の指導を行った。

※課題作文に関しては、1年間で日本語が15本ほど、英語で5本ほど書かせ、教員が一人ひとり丁寧に添削・コメントし、フィードバックした。

〈2年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

①「情報分析」の技術…対象物としての絵やテキストに書かれた情報を証拠として取り上げ、それらを総合して解釈を示す方法。

②「認知」の技術…絵・テキストを用い、1つの対象物に対して複数の視点に立つ方法。

③「議論」の技術…論理の組み立て方・立論の立て方・反論の方法・ディベートの実践。

※「議論」の技術をもとに、GCP企画「人権ディベート」を3学期に行った。

※校内の進路指導部と連携し、大学の志望理由書作成の指導を行った。

※修学旅行先の青森県について研究し、ポスターセッションを行った。

〈その他〉

①生徒に毎時間、授業で学んだことを記入・ファイリングさせ、ポートフォリオを作成させた。

②担任教員が「言語技術」の授業に毎回一緒に参加し、教員自身の言語運用能力の向上に努めた。

③12年一貫を見据え、創価中学校、東京創価小学校においても「言語技術」の授業を開始した。

④校外の方を対象とした教育公開講座、オープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP)】(全校生徒対象のSGHプロジェクト)

①1年生は「SDGs、環境、貧困」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「国際パートナーシップ(模擬国連)」をテーマに設定し地球規模課題に対する探究学習を進めた。

②学期に2回(5月、6月、10月、11月、1月、2月)、GCP企画の時間を設け、運営は各クラスの希望者で構成されたGCPリーダーによって実施された。

③3年生は、GCP企画の総括として各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行う「ファイナル・プロジェクト(Final Project)」に取り組んだ。また、その成果を日本語・英語の二言語のポスターと論文にまとめ、ポスターセッションを実施した。

④GCP企画はすべて一般公開し、多くの学校関係者・企業関係者・保護者に見学いただいた。

⑤7月のオープンキャンパスでGCP企画「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施した。

○【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】(選抜生徒16人対象のSGHプログラム)  
毎火金の18時~19時30分に、SGDsのテーマと関連づけながら、各グループが設定した仮説をもとに、地球規模課題に関する探究型学習を行った。

①地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンテーションスキルを活用した探究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。

②広島と長崎で実施されたフィールドワークでは平和教育の実態調査を目的とし、インタビューを中心に情報収集の技術力を向上させた。またアンケート調査を実施し、その分析においては論理的・批判的思考力を高めた。

③報告会は英語での実施を基本とし、SkypeやYouTubeなどのSNSを利用して海外との交流や情報発信を行った。

- ④GLP を通じて学んだことを広げるため、創価中学校1年生（220名）に対して、「核廃絶問題」に関する出前授業を実施した。
- ⑤研究成果として核とSDGsをはじめとした問題についての英語小論文を作成させた。

#### ○【その他】

- ①国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLP で定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA 等）で行った。特に、都内のフィールドワークにおいては、各学年の GCP 企画と、より連動した内容になるよう「JICA 地球ひろば」は1年生、「国立ハンセン病資料館」は2年生、「国連大学」は3年生対象へと組み換えた。また海外フィールドワークは時期を夏季より秋季に変更し、現地高校生との意見交換および識者との交流、プレゼンテーションを行う。そこで学んだ内容を、10月に行われた学園祭等において、ポスターセッションにて発表した。また、カリフォルニア・モントレールで行われた CIF（Critical Issues Forum）に参加した。
- ②グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し希望者を対象としたセミナーを開催した。
- 4月：オタゴ大学国立平和紛争研究所の李成鏞准教授、5月：聖エジディオ共同体クアットルッチ事務総長、6月：フィリピン共和国カガヤン大学ウルドゥ・テハダ学長、9月：ベネズエラ・ボリバル共和国のイシカワ特命全権大使、10月：東京大学・先端科学技術研究所マルチネス博士、12月：ルースキー・ミール基金ウラジーミル・コーチン専務理事、ニコライ・セルゲイチェフ局長、1月：国連児童基金（UNICEF）公的パートナーシップの正木絵理氏（本校卒）、3月：国連常駐調整事務所（Resident Coordinator Office）ボリビア官民連携専門官坂本敬子氏（本校卒）とほぼ毎月行った。
- ③・イングリッシュ・キャンプ(全校生徒より希望者23名)：創価大学にて1泊2日で実施した。留学生と3,4人ずつのグループを構成し、日本文化に関する英語によるポスターセッションを行った。
- ・サイエンス・イングリッシュ・キャンプ(全校生徒に啓蒙、10名参加)：東京工科大学にて3日間で実施。実験結果を英語にてポスタープレゼンテーションを行った。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### 【言語技術】

- ①昨年度末と同じ項目で、今年度末も1、2年生全員にアンケートをとった。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、95%以上の生徒がそれらの技術の重要性を実感しており、昨年度より5%近く上昇した。これは、昨年度の反省を活かして授業内容をブラッシュアップした成果と思われる。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生は、90%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感しており、こちらも昨年度から10%以上上昇した。
- ②上記①の同アンケートにおいて「言語技術で学んだことを英語で活用できた」と回答した生徒は1年生で83%、2年生で88%おり、1年生より2年生の割合の方が高くなっている。また、同項目に関しては、1年前の1年生（現2年生）は79%であった。今年度のカリキュラムと学習内容が昨年度以上に洗練されたことの証左と言える。
- ③上記②の「英語で活用できた」という回答が上昇したアンケート結果は、実際の外部試験でも成果を出している。昨年度より年度第3回目の英検2級を、高校2年次の総合クラス（「言語技

術」の授業を受けているクラス)のほぼ全員が受検することになっているが、リーディング・リスニング・ライティングの3技能のCSEスコアの平均は、昨年度は1497.7だったが、今年度は1501.1と微増した。ライティングのみで見ると、昨年度は491.8だったが、今年度は505.9と大幅に上昇しており、「言語技術」教育の成果と言える。

- ④3年次で行うGCPファイナル・プロジェクトの最終レポート作成において、国語科と連携し、パラグラフ・ライティングの指導を週1時間実施した。文章の質は昨年までより格段に上がり、文章を書くことが得意でない生徒も、相応の文章を書けるようになった。
- ⑤創価中学校・東京創価小学校において「言語技術」の取り組みが本格的に始まり、小中高それぞれの「言語技術」の授業担当者会議も実施され、12年一貫の「言語技術」教育のカリキュラム作成が推進された。
- ⑥つくば言語技術教育研究所(三森ゆりか所長)の研修に教員を派遣し、指導教員の増強をさらに図ることができ、よりきめ細かい指導をすることができるようになった。
- ⑦「言語技術」の授業で行っている内容をホームページで発信・紹介し、校外にも広く知ってもらうことができた。
- ⑧生徒には昨年同様、毎回の授業で「学んだこと」等の振り返りをさせ、記録・ファイリングさせた。このファイルを見返しながら、身につけた技術を活かそうとする生徒の姿が見られた。実際に活かせるポートフォリオの作成ができた。
- ⑨昨年に引き続き、「言語技術」の授業に担任教員が毎回参加した。各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れがいつそう強くなった。
- ⑩学校の取り組みである「パーソナル・エッセイ」(高校生活のキャリアデザインを文章化するもの)の作成と、授業で学んだ作文の技術を連動させながら、効果的な指導を実施できた。
- ⑪各教科の授業やクラスでの話し合いの場面において、生徒たちが「言語技術」を用いることにより、議論の進行がさらにスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ⑫英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

#### 【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)】

- ①SGHの3年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができた。1年生の企画においては、刻一刻と変わる社会情勢に合わせて、古くなった映像教材の視聴を取りやめ、別の企画を行うなどした。
- ②本年度は、SGHの取り組みを1年次から受けてきた生徒が3年目を迎えることもあり、「言語技術」やGCPの取り組みの総決算としての意味合いを込めて高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」を昨年までの2回の先行実施の実績も踏まえて実施した。本年度は、「現代社会」「現代文」「英語表現」の3科目が連携し、分析・探究・執筆・英訳等を教科横断型に指導する体制をつくり、指導の充実を図った。
- ③協働的な学びを通して、「他者との協働性」が向上したことがアンケート結果を通して伺える。SGH初年度の2016年5月と2019年2月のアンケート結果を比べると、他者との協働性を問う質問に対して「できた」と答えた生徒が18%から30-40%前後に増加した。また、現3年生を見ると、85%を超える生徒が協働能力に自信をつけている。
- ④GCPの運営を担ったGCPリーダー(生徒の希望者で構成)は半年交代制をとり、前期は164名、後期は167名の生徒(全校生徒の約15%)が活動した。GCPリーダーに実施したアンケート

トでは、GCP リーダーの活動を通して「情報を伝達する力」「チームワーク」「コミュニケーション力」が身についたという生徒が6割を超え、生徒主体に運営を行う体制が一定の成果をあげていることがわかる。

#### 【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

- ①課題研究方法を指導において、「より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入した。これにより、より分析的な研究アプローチを取り入れることができた。
- ②年間の研究テーマを「核廃絶問題」に設定。核の問題を軸に設定した。これにより、理科学的分野と社会科学分野を横断しながらの研究が深く行えた。
- ③年間学習の集大成として、姉妹校である創価中学1年生(220名)にたいして「核廃絶問題に関する出前授業」を100分間実施した。これにより、これまで学んできた内容から最も大切な要素を選び、探究の内容をふまえての普及活動とすることができた。
- ④フィールドワークは広島と長崎で実施した。ここでの最大の目標は、出前授業実施に向け、被爆地でどのような平和教育が行われているかを調査することに設定した。これによりインタビューの技法なども活用することができた。
- ⑤核廃絶問題の内容と、SDGsをはじめとした様々なテーマと複合させて、企画書に関するチュートリアルのと、英語で500語以上の小論文を書かせた。仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。また英語と日本語で思考させることで、言語の論理的な運用能力を育てることもできた。この実施により、英語力の向上と、活動の集約のために活用していた英字新聞プロジェクトへの参加は取りやめた。ただし、GCP企画英字新聞プロジェクトに、GLP生徒代表が参加し、GLPの活動報告の記事作成にあたった。
- ⑥2019年3月に実施される核廃絶に関する高校生による国際会議・クリティカル・イシューズ・フォーラム(カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所主催)に向けて、英語によるプロジェクト作品を製作した。ここで発表する中学模擬授業の内容も英語で報告した。
- ⑦アメリカの核廃絶問題の専門家によるシンポジウムに参加し、解決困難な地球規模課題の最前線に触れることができた。
- ⑧評価方法として、年に3回「あなたにとっての地球市民とはなにか」を記述させ、各人が自分自身の意識の変容を確認しながら、1年間に及ぶプログラムを終わらせることができた。また資質・能力の基準について、事前に提示しており、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させることで、変容を測ることができた。

#### 【その他】

上記に加えて、SGHの活動を通して、本年度は以下のような成果が見られた。

- 生徒の活動：第23回全国中学・高校ディベート選手権(ディベート甲子園)準優勝。第7回手帳甲子園本大会<(株)NOLTYプランナーズ主催>に全国大会2年連続出場。英字新聞作成プロジェクト「YLP」の交流会(ジャパン・タイムズ社主催)出場。第13回「全国高校生英語ディベート大会」出場。「学び舎ユネスコ教養文化講座」にて玉川上水の生態調査研究のプレゼンを行い、同会場で行われた「学び舎ユネスコギャラリー展2019」に報告内容を展示。武蔵野大学孔子学院での「第3回中国語スピーチコンテスト」にて1位、2位を独占し日本高校生交

流訪中団へ参加。第3回サステナブル・ブランド国際会議 2019 東京に13名参加。2018 ジュニア・グローバルリーダーズ・プログラムに1名参加。筑波・香港大学グローバル・リーダーズ・プログラムに1名参加。トビタテ！留学 JAPAN 第4期生アカデミック・テイクオフ（新高校1年生）に1名参加。香港 TOKYO GLOBAL GATEWAY に6名が参加。

- 本年度より、東京外国語大学の世界展開力強化事業（ロシア）「T U F S 日露ビジネス人材育成プログラム」と連携し、学校設定科目国際理解のロシア語選択者との交流が開始された。
- 教員の活動：日本キャリア教育学会第40回研究大会（12月9日、早稲田大学）にてクリティカル・ライティングセンターの取り組みを報告。第5回 Conference on Global Higher Education at Lakeland University Japan（6月9日、東京）にて報告。1<sup>st</sup> International Conference on Ikeda, Soka Studies in Education (Depaul University / Chicago, Illinois)（8月9～11日、アメリカ）にて報告。

#### <添付資料> 目標設定シート

#### 8 次年度以降の課題及び改善点

##### 【言語技術】

- ①生徒の論理的思考力・批判的思考力の伸長を評価するために、客観的に測るアセスメントテストを導入する。
- ②「言語技術」がすべての学びの土台となるよう、学校全体、また各教科との連携を密にして生徒が活用する機会を増やし、活用事例を蓄積させていく。
- ③3年次G C Pファイナル・プロジェクトの、最終レポート作成指導において、国語科・英語科・地歴公民科が連携した合教科型の取り組みを行ったが、今年度の反省をもとに役割分担を見直し、より効果的な指導体制を検討する。
- ④東京創価小学校・創価中学校・創価高校の12年間を通した、効果的な「言語技術」教育カリキュラムを作成する。
- ⑤「言語技術」の授業で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、ホームページでの発信を強化する。
- ⑥作文の評価ルーブリックや、自己・相互による評価法の開発を推進する。

##### 【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①来年度のファイナル・プロジェクトは、「現代社会」の授業をティームティーチング(TT)の体制で実施し、通常の授業に加え、テーマの設定やレポートの添削など、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図る。
- ②ファイナル・プロジェクトはこれまで1人1テーマで実施してきたが、同種テーマの生徒同士をグルーピングし、外部からの指導や外部への発信をグループ単位で行えるようにする。
- ③GCP企画で実績を重ねた各種教材を、他の学校でも実施できるように整理し、発信する。また、近隣の小中学校を対象に行う出前授業などの実施を検討する。
- ④生徒の学びをポートフォリオとして残して、個人の探究学習の成果として保管させる。Japan eポートフォリオと連動させていく。
- ⑤新カリキュラムの「探究」に対応するように GCP を発展的に解消しながら、新しく組み替える準備を行う。

### 【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

- ① S G Hプログラム終了後も、核廃絶問題をテーマとしながら探究学習が行える取り組みを継続するため、G L Pの一部を3年次学校設定科目として取り入れることとする。これにより、これまでの火曜・金曜日の18時から19時半までの時間帯から、3年生のみ火曜日5, 6限目、2・3年生ともに金曜日の18時から実施することになる。授業の内容の差は、3年生の授業内容を講義中継アプリ Zoom で録画し、金曜日授業までに視聴の上、課題を行ってくる事とする。
- ② 昨年度より、より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入してきた。しかし、内容に理系的要素が強いことと、授業時数に対してボリュームが多すぎることをふまえ、おなじ啓林館の「課題研究メソッド Start book」を活用する。ここでは仮説を立てるために必要な資質・能力を育成する事を目指す。
- ③ 2022年度の本格的な開始を目指し、「総合的な探究」の核となるカリキュラムの開発を目指す。先述した啓林館の課題研究メソッドを中心教材として、各種シンキングツールや、I Bで活用される「知の理論(TOK)」の技術をバランスよく取り組んでいく。また、2018年度には実施しなかったが、映像の分析の技術をカリキュラムの一部に取り入れる。これにより、映像も含めた多様な情報から適切な情報を取捨選択するリテラシー能力を向上させる。
- ④ 引き続き、資質・能力についての客観的な評価アセスメントを取り入れていくことを検討する。
- ⑤ G L P卒業生の Facebook グループサイト「GLP Alumni」を開設し、G L P卒業生の活動について追跡調査を行っていく。また、G L P卒業生として情報の共有を行い、生涯にわたる友情とつながりの開発に役立てる。

### 【担当者】

担当課	経理募金課	T E L	042-342-2611 (代)
氏 名	山下 英一	F A X	042-342-2617
職 名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp